

篠塚慎吾先生の人と学問

岡 本 博 司

篠塚慎吾先生は、平成17年12月13日心筋梗塞のため逝去された。61歳という若さでありにもあわただしい旅立ちであった。

先生は、昭和19年3月21日東京でお生まれになり、東京都立両国高等学校、東京学芸大学教育学部（2類社会科）、東京学芸大学大学院教育学研究科（社会科教育講座経済学専攻課程）を経て、昭和45年4月千葉商科大学に就任された。学部および大学院では、主として経済原論の講義とゼミナールを担当された。先生の学問にたいする態度は非常に真摯であり、他方学生にたいする指導は大変熱心であり温情溢れるものであった。また、平成3年4月から2年間千葉商科大学教務部長として教学運営の要職にあたられた。平成2年と平成12年には、それぞれ、20年と30年の永年勤続の表彰を受けた。学外活動としては、経営学会、理論計量経済学会、経済政策学会に所属され、それぞれの学会で積極的な活動をされてきた。

先生の専門の理論経済学について、また先生の深い学識について、私にはもとより語る資格はない。しかし先生との永年にわたるおつき合いを通じて、私が知り、感じたことを語ることでお許し願いたい。

先生の経済学にたいする研究は非常に多岐にわたっており、一言で言い表わすことはできない。そこで私独自の判断で分類しながら、述べてみたい。第1は、企業経営の学問領域に、経済学の理論、つまり経済学の分析ツールを用いて分析しようと試みたことである。この考察は、経済学や経営学を研究している人々、および現場の経営者、ビジネス・エコノミストを自任する人々にいろいろな示唆を与えた。第2は、厚生経済学の分野における研究である。なかでも恩師の矢島鈞次先生の監訳のもとで、渡部茂氏と共訳されたジョン・ロールズの『正義論』の翻訳は圧巻である。ロールズは、平等主義に基づいた社会状態を判断する2つの新しい基準を検討している。すなわち、公正の基準と不公平の基準がそれである。この難解な書物をよくぞ日本語に訳してくれた、と感謝申し上げる。第3は、ハイエクに関するものである。新自由主義者の長老に位置するハイエクの主著『法と立法と自由』に依拠して、自由主義的経済思想の背景となっている社会観を論じている。〔命題1〕自由社会の望ましさ。開かれた社会の下では、正義行動のルールの拘束下で各人に活動の自由を保障する時、各人の機会が最大化される。〔命題2〕社会の全面組織の不可能性。社会を全面的に組織しようという試みは、設計主義的合理主義の誤った社会観に依拠しており、各人に分散保有されている知識の有効利用に失敗する。先生は、この2つの命題をハイエクがどのように導出し、それにどの程度成功しているのかを探求しているのである。

以上のことは、先生の著書、論文から読み取ることができる。学究的な先生の出版された著書は共著を含め9点、学術論文23点、翻訳（共訳を含む）3点の多数に及び、常に真

理の探求を追い求めた研究活動をうかがい知ることができる。

先生は、ゴルフやスキーを趣味とされ、時々出掛けられているようであった。また囲碁もお好きだったとみえ、大学からの帰り駅の売店で専門の新聞を求められ、電車の中でそれを読むのを楽しみとされていたようである。読書も専門の経済学は当然のこととして、とくに塩野七生の『ローマ人の物語』や池波正太郎の『鬼平犯科帳』を愛読されていたようである。

私が先生に最後にお目にかかったのは倒れられ病院に搬送される前日、週末CUC会計人クラブの会合で会いましょうというのがこの世でのお別れのことばとなってしまった。また先生の入院中、夫人の道子さんから「病状は小康状態となり、病院の先生からも気長に治療していきましょうと言われた」旨の電話をいただきわれわれも一安心した。しかしながらその数日後、残念ながらわれわれの期待を裏切り先生は鬼籍に入られた。

先生が本学に就任されて30有余年、卓越した指導力と長年の貴重な経験でもって本学の発展に大いに寄与したことにたいし、尊敬の念を抱きつつ、感謝申し上げたい。